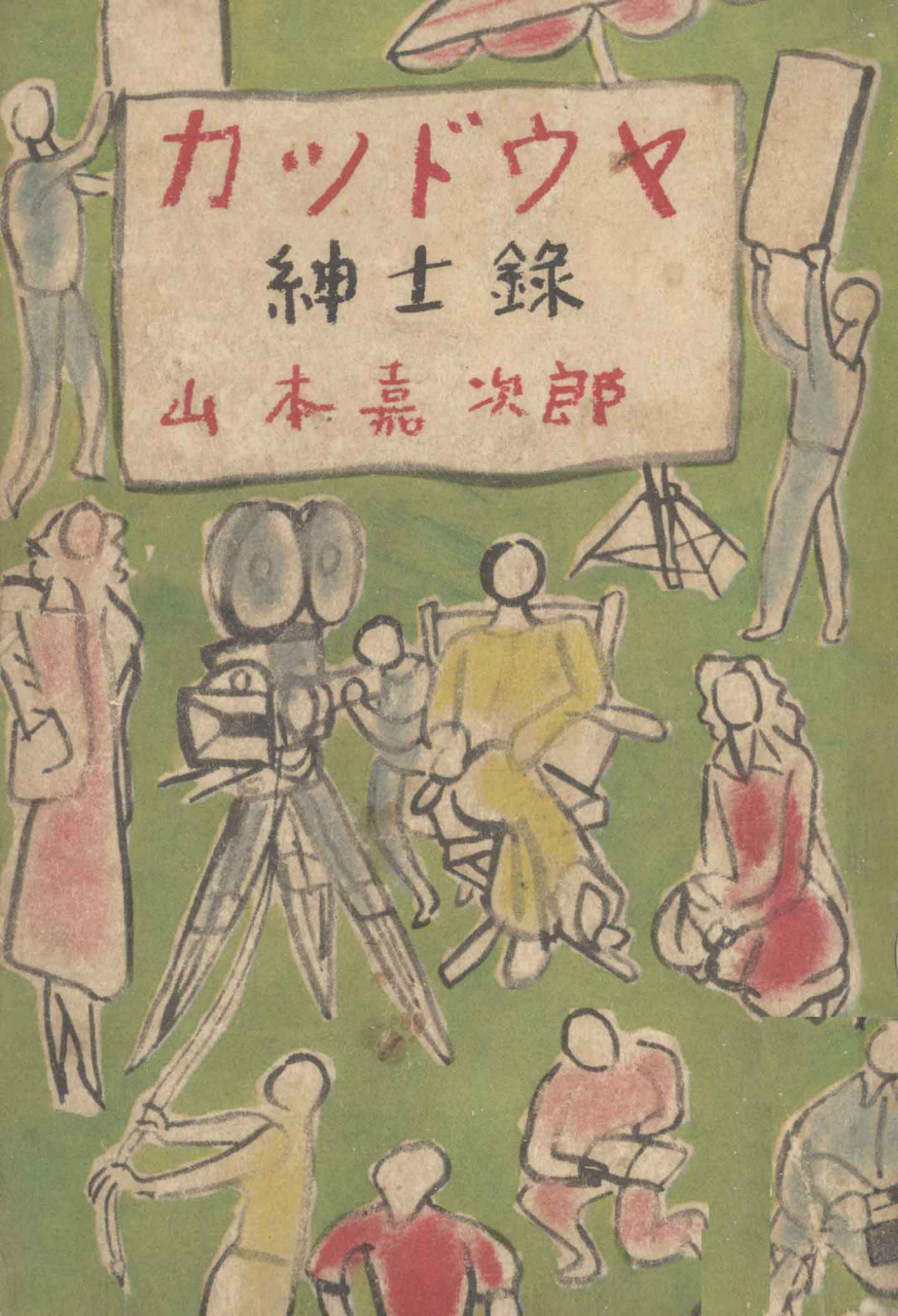


カツドウヤ

紳士録

山本嘉次郎





山本嘉次郎

講談社版

カッドウヤ紳士録

(誠和製本)

昭和二十六年二月十五日印刷
昭和二十六年二月二十日発行

定價百六十円

著者 山本 嘉次郎

東京都文京区音羽町三ノ十九

発行者 野間 省一

東京都文京区音羽町三ノ十九

印刷者 益子 恒義

東京都文京区音羽町三ノ十九

印刷所 豊國印刷株式会社

東京都文京区音羽町三ノ十九

発行所 株式会社 大日本雄弁会講談社

振替口座 電話(三三)一三一番
東京三九三〇 九段(代表)一八六番

(全国出版協会会員)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたしません

目次

銀幕の裏

カッドウヤ人種

監督てんやわんや

いまはむかしの物語

活動大写真

銀座あの頃

白^{ビエラ}夜^{イノチ}会

眞夏の夜の夢

助監督時代

カンドウ・キネマ

一銭五厘の弟子

一

六

一九

元

三八

四

五

五

遠くへ飛びたがる女……………六九

向島撮影所……………八二

山語らす……………九四

十七四の籠の鳥……………一〇三

喜劇修業

マキノおやじ……………一二七

イロハのへ……………一三六

金曜会……………一三三

カタキン聯隊長……………一三九

年増の巡査……………一四九

P^ビ・C^{シー}・L^{エル}から東寶へ

金をくれる会社……………一五三

青春酔虎傳……………一七〇

コナ・キネマ……………一七

良人の貞操御用心……………一八

インギン・ブレイ……………一九

巷に雨の降るごとく……………二〇

デコとボク……………二一

附

けたり

ニューフェイス……………二二

話・の・泉……………二三

あとがき……………二四

銀幕の裏

カッドウヤ人種

セシル・B・デミルの作つた「十戒」という映画の見せ場に、モーゼの祈りによつて紅海の水が割れて、大群衆が大海を押し渡る画面がある。「ロスト・ワールド」という映画では、恐龍や原始鳥などの前世紀の動物が、互いに喰ひ合いの死闘を演じる戦慄的な画面があつた。「心の旅路」で、ニューヨークのホテルについた女が、硝子屏を開けるとその硝子の表面に白亜のステーションビルが映る、いずれもトリックを用いねば出来ないことである。最近封切された原子爆弾を扱つた「始めか終りか」などは、トリックがいかに發達したかの見本のようなものである。

トリックにも、ピンからキリまである。前述のような堂々たるものから、逆回転撮影でプールで泳いでいる人間をスッポンと跳込台のてつぺんに飛び上がらしたり、二重撮影で同じ人間を二人にして見せたり、銀座通に軍艦を走らしたり、猿飛佐助をバツと消したりするというような、バカ／＼しい荒唐無稽なことにまで、使われている。

このように、どの映画にも大なり小なりトリックを使うことから、映画とは珍妙不可思議な白晝夢を大衆の目前に描いて見せるものだという観念を、いつしか人々の脳裡に植えつけてしまつたらしい。したがつて、撮影所とはそのような白晝夢を製造する「夢の工場」とされている。その証拠には、撮影所を見物に来る人々は、なにかしら、不思議なものを見て歸ろうとする好奇心に満ちている。

長谷川一夫の扮した殿様のかぶつているあの鬘かづりは、実は豚の尻尾の毛で作つたものですぞ、などと説明してやると、ホホウ！ と大満悦である。山田五十鈴の女乞食の食べているあの握り飯はなんで作つたのです？ と聞かれて、当り前の御飯ですよと答えると、見物はつまらなそうな顔をする。夢の工場から、なにか不思議なものを発見したいという期待を裏切られるからである。

映画というものは、トリックによりいくらでも不思議なことが出来るし、撮影所はそれを作る不思議に満ちたところであり、そこに働く人々、すなわち人呼んでカッドウヤと称する人間たちは、よほど変つた人種だろうと思われていることは残念ながら事実である。

実際のところ、そう思われても文句のいえない点もある。いつぞや、日本アルプスにロケーションをしたとき、アルプスの入口の島々しまぐみという山村で撮影していると、その長老らしい老

人が、終始撮影隊につきまとい、なにか警戒している風であつたが、三日目か四日目に、とうとう耐りかねた様子で、

「一体、あんたたちは日本人かね、それともドコ人かね」

と聞いた。なるほど、風変りな服装をしてるし、挙止動作ことごとく行儀作法を外れてゐるし、第一使つてゐる言葉が老人には通じなかつたのである。

「トラックアップして、ヒンチンのアップになつて、オバアアップすると、チータンなめのデコのバストでフェイドアウトでオールチョンやア！」

なんて言葉は、ドコ人が聞いたつて判るものじやない。これを日本語にホンヤクすると、「移動車でカメラが近寄つてヒンチン（佐伯秀夫）の顔の大半になり、それがダブッてチータン（竹久千恵子）の肩越し（レンズ前に、人物なり道具なりの一部分を通して対照物を撮影することを、ナメルという）に見たデコ（高峰秀子）の上半身像を写して、溶暗（すつと暗くなる）すると、それで今日の撮影は全部終りである！」

というワケなのだからホンヤクするにも息が切れる。老人がいぶかしがつたのも当然である。外國のスパイ團が、わが平和な山村に入り込んで、日本アルプス爆破の測量をしてゐるのも思つたのかもしれない。

……とはすこし大げさだが、事実、戦時中はスパイ扱いを受けたことも、しばくであつた。伊豆の川奈ホテルで撮影していると、恐しい顔をした私服の憲兵がやつて来て、レンズを全部見せろという。全部見せたら、他にまだ匿かくしているだろうといつて承知しない。

「なにしろ、お前たちの使うレンズの中には、こゝから大島にいる人間の顔が写るといふがあるそうじゃないかッ！」

いくら望遠レンズだつて、そんな天体望遠鏡みたいな化物があるもんじやない。こうした嫌疑も、映画にはトリックというものがあつて、油断も隙もならないという先入観のなせる業なのである。

あるニューフェイスの女優に、はじめて撮影所へ入つてなにが一番困つた？ と聞いたら、まず言葉のわからないこと、次に、誰が偉いのかサッパリわからないことだと答えた。それで誰彼なしにおじぎをしておけば間違いないと思つて、ペコ／＼やつてたら、その中でも威厳のある偉らそうな人が來たから、あわてて最敬礼したら、それがショットチュウ撮影所へやつて來る有名な狂人きやうじんだつたので、みんなに笑われた末、フーちゃんというアダ名までつけられてしまつたとコボした。頭の変なのを、フーチャカピトという。そのフーちゃんなのである。

撮影所では、良くいえば自由な空氣、悪くいえばルーズで、長幼上下の別をあまりつけな

い。みんな対等のような態度、口のきゝ方である。綜合藝術の製作工程が、自然このような空気をかもし出しているのかもしれない。いざ撮影となれば、小さな子役に大の監督がペコ／＼することもあるし、大道具のオッサンに所長がお世辞を使わなくてはならぬ場合もある。こうしたことも、誰が偉いのか判らなくなる因であるが、さつきも書いたとおり、服装から來ることも大きな原因である。

撮影所ではベレー帽が流行ると、猫も杓子もベレーをかぶり出す。製作部長から、腰の曲がつた風呂焚の爺さんにいたるまでベレーである。これでは、初めての人間には、誰が偉いのか見当もつかぬのは当然であらう。

服装についても、ひとかどの氣質がある。バリッとしたものを、バリッとは着ないで、ワザと粹に崩して着こなすところに誇りをもっている。流行を作ることには興味をもつが、流行を追うことはイサギヨシとしない。ましてや、街のアンチャンの眞似なぞは、オカアシクッテ！とクイベツする。だから、アロハやリーゼントのたぐいは撮影所では見られないのである。

……カクカクシカジカのことどもから、カッドウヤは、一種変つた人種であると世間から見られているのである。……ボクはそのカッドウヤの水にそまつてから今年で丁度三十年、カッドウヤ連の餓鬼大將みたいな監督というものになつてから、もはや二十五年たつてしまつた。

監督てんやわんや

一口に監督というが、さて、映画の監督とは、どういうことをするのか、ハッキリしたことは、案外世間では判つていないらしい。

巡查がまだサーベルというものをブラ下げていた頃、歳末などの不審訪問で職業を聞かれ、

「監督です」

と答えると、

「なにイ？ カントクウ？……土木のか」

よくこんな風にいわれたものだつた。

「いゝえ、映画のです」

「あゝ、カッドウの監督か！」

さもバカにしたような顔をする。益田晴夫という監督がホロ酔機嫌で、

わアかき血に燃ゆるものオ

光輝みてるウ わアレらア

と歌いながら歩いていたら、革命歌と間違えられて三日も留められたり、伏水修という才を惜しまれつゝ若くして世を去つた監督が、バリ土産のベレーを被つていたら、なんだそのオカシキ帽子は！一寸来いとブタ箱に叩き込まれたなど、いずれも映画監督という聞き馴れない商賣が祟つたせいかもしれない。子供が珍しい虫を見つけると、弄つたり虐めたりするのと同じ心理だろう。

戦争に負けて、文化々と騒ぎ出し、サーベルがピストルになつた。巡査の態度も大分變つたろうと思つたら、

「映画の監督サンですか……ほゝう！」

なんて口では鄭重だが、依然として珍しそろに見直すのである。

「あなたのデスナ、作つたデスナ、脱獄デスナ、あの受刑者の扱いにデスナ、異議がデスナ……」デスナ、デスナで一時間ばかりの御高説を聞かされたこともある。

「自分は、シナリオちゆうもんを書きたいんでアリマスが、どう書けばよいか、タンカンに教えて下さう」

なんて特攻隊上りらしい若い巡査から、コワイ目に会つたこともある。どちらにせよ、変に珍しがられてるという点では、以前も現今も同じである。

たまに、学校の同窓会などに出席すると、カッドウの監督ほど良い商賣はないと、みんなから羨望の的になる。

「若いキレイな女優が、すぐに云うことを聞くだろう」

「どんなスターでも、ガン／＼怒鳴りつける」

「自分の好きなことをやつて、ジャン／＼金を儲けてる」

とかいうのが彼等の羨しがる所以である。なかば冗談、なかば岡燒きでいつてるのかと思うと、案外まじめにそう信じているらしい。

そういう同窓の中には、会社の社長もいる、大学教授もいる、医学博士もいる。ところが、そういう連中にかぎつて映画のことはなんにも知らず、ましてや映画監督つてどんなものか皆目わかつていないのである。

そこで、こんな連中には、母校の始祖である福沢諭吉翁を引つ張り出すに限ると思つて、

「およそ、その國の文明の度合を知らんと欲せば、その國の婦人がどんな境遇におかれているか、それを見るのが早道である……と福沢先生が云つたのをおぼえてるだろう。男女同權の現代じゃこれを映画に置き換えて見るといふ。オラ、カッドウなんか見たことがない、なんて大臣がいるうちは、文化日本なんてチャンチャラおかしいじゃないか。大体、いまだき映

画を見ないなんて奴は余程の不屈者だから、こういう奴から不入場税をウンと絞^{しぼ}り上げて、一般良民の入場税を Teppai すべきである……」

とマクラを振つて、映画監督についてジュン〜と説明したことがあつた。

……監督は、朝は早目に撮影所に行く。監督なんてエライのだから、一番あとから行けばいいなぞと思つたら大間違ひ、むしろ人より先に行つて、セットの入口で、眉をシカメ、腕を組んで立つてゐると、やアいけねえオヤジもう來てやがらア、てなことを云つてみんなセットに集まつて來る。これが一日の能率^{のうりつ}にひどくひどくのである。

「監督つてものは、能率の責任まで持たされてゐるのか、それじや土方人夫の現場監督と同じじやねえか」と医学博士がまぜつかえす。

まア聞けよ、能率の責任を持つてゐるわけじやないが、映画には封切日という「嚴肅なる事實」がある。それに間に合わせるようにスケジュール（予定）を組んであるが、女優の顔にオデキが出來たり、電力が低下したり、台風で撮影所の屋根が飛んだり、そんなこんな予測のつかない支障が起つて、予定の作業日数をたつぷりと使えたためしはないのだ。

日数が詰まれば、それだけ仕事の手を抜かなくては封切に間に合わない。これでは、みすみす作品の質が落ちる。それをしたくないために、毎日々々の時間をいかに巧みに使うか、そし

ていかに能率を上げるか、これが監督の一番重要な役目になつて来るのだ。

「それなら、封切日を延ばせばいいじゃないか」大学教授がアッサリと論断する。

そうはいかない。今でこそフリーブッキング（自由配給制）になつたが、それは名のみで、實質は依然として番線制度をとつてゐる。一本のフィルムが一番館（大都市の封切館）から二番館、二番館から三番館へと一週毎に順送りに廻つてゆく。あたかも流れ作業のようなもので、封切が間に合わず、一番館に穴が開くと、穴があいたまゝ全國の映画館に波及してゆくから、たちどころに収入減となつて、みんなの月給にひびいて来るのだ。

「なるほど、樂じやねえな」さすが社長は素早くソロバンをはじいた。

「……だが、いよく撮影がはじまつてしまえば、役者を叱つたり、カメラマンに注文したり、あとはヨーイハイと怒鳴つてればいゝんだらう」この医学博士、外科なのでいうことが荒つぽさ。

撮影がはじまればというが、その撮影をはじめめるまでが一苦勞なのだ。まず最初に撮影する画面を示して、カメラの位置をきめ、段取りをこまかく説明する。そこで初めて照明も、録音も、小道具も、大道具も、めい／＼の準備活動を開始する。それが相手が大ぜいで、しかも種種マチ／＼の人々の集りだから、なか／＼意志が傳わらない。ワア／＼と怒鳴り合つてゐる

と、助監督が、

「轟さんの衣裳を見て下さい。どうも変なんです」

と呼びに来る。衣裳部へ駈けて行つてみると、洋服屋が寸法を間違えてダブ／＼のものを作つて來ている。いまずぐに使う衣裳なので仕立直す暇はない。じゃア袖と裾を切つて糸で簡單にとめて、肩のところはパッド（つめもの）を入れてゴマ化し給え、早く頼むよ一番手なんだからナ、と衣裳方にいつてるところへ、俳優事務が心配そうな顔をして、一寸手招く。樂屋へ行つてみると、これも一番手に出るニューフェイスの若い女優が、鏡を前にしてシク／＼泣いている。どうしたんだと聞くと、

「先生、眉がうまく引けないんですウ」

涙でマスカラ（黛）^{まゆすみ}が溶けて、クワン／＼の顔をして泣いている。色氣もなにもあつたもんじやない。

「キミ、眉なんてものはネ、いじり廻しちやつたら、処置がつくもんじやないよ。一ぺん顔を落して（化粧を落して）、オバさんから熱いお湯をもらつて、それでよく顔を洗つて、お茶でも一杯のんで氣分をしずめてから、あらためて最初からやつて見給え」

そこへ録音助手が飛んで來て、